

榊原 洋一

(Sakakihara Yoichi)



お茶の水女子大学大学院教授

CRN所長

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）所長。お茶の水女子大学大学院教授。日本子ども学会理事長。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞。二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学大学院教授。

主な著書：「オムツをしたサル」（講談社）、「集中できない子どもたち」（小学館）、「多動性障害児」（講談社+α新書）、「アスペルガー症候群と学習障害」（講談社+α新書）、「ADHDの医学」（学研）、「はじめての育児百科」（小学館）、「Dr. サカキハラのアドHDの医学」（学研）、「子どもの脳の発達 臨界期・敏感期」（講談社+α新書）など。

保育の科学

保育は、子どもの発達についての深い洞察をもったフレーベルなどの先人によって創設された歴史をもっています。そして保育の学問である保育学も、保育理念と経験に裏打ちされた学問であるといつてよいと思います。

同じ子どもを対象とした学問である医学（小児科学）も、かつては経験論による学問でしたが、身体の構造と機能が明らかになるにつれて、実証的な科学となりました。

今、保育学も、発達心理学、脳科学、神経科学などの発達によって、実証科学になりつつあります。

例えば保育実践の中で育まれる社会性や情緒（情動）の発達について、近年の発達心理学や脳科学が多くの知見を提供しています。社会性の発達に必要な脳機能についての研究も、脳機能画像法の発達によって盛んに行われています。生活リズムを構成する食事や睡眠についての、科学的な研究も進んでいます。保育実践にこうした研究の成果を生かすことも、可能になってきています。

本講演では、こうした実証的な学問としての保育学の課題についてお話をいたします。